

ウクライナ凡人所感

池田昌博

1

「物語 ウクライナの歴史」をベースに私見を含めて集約しました。また、本書に記載されない独立後の動向を各種情報を追記しています。今回のロシアによる侵略行為は断じて容認できませんが、この歴史的背景も考察しています。

黒川 祐次 著

物語 ウクライナの歴史

ヨーロッパ最後の大国

緊迫する
ウクライナ情勢を
知るための一冊

ロシアが影響下に置こうとするのはなぜか？

中公新書 1655 定価946円(10%税込)

知らなかったウクライナ

「ひまわり」の舞台（旧ソ連はこの事実を伝えなかった。）

「花はどこへ行った」の原曲

花はどこへ行ったの作者ピート・シンガーは、ウクライナを舞台にしたショーロホフの著書、『静かなドン』の冒頭に出てくるウクライナ民謡からこの曲のヒントを得たという。

「赤い闇・スターリンの冷たい台地で」

2

ウクライナ飢餓を取材した英国人ジャーナリスト、29歳で変死

映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』 | 2020年8月14日(金)全国公開！ (akaiyami.com) この事実是对独戦を優先したため連合国で伏せられる。

「跳人 ブフカ」

サルトルはハンガリー動乱でどう反応したか

- サルトルは当初ハンガリー労働者による反抗を単なる当自国政治の民主化の要求とみなしていたが、事態が混乱を極め、混迷を深めるに及び、そのmovementは反革命であり、右傾化であると断ずるに至った。
- その後、「スターリンの亡霊」を書きソ連の軍事介入を批判するが、ソ連の非スターリン化過程の錯誤として全面的批判を留保する。サルトルは「仏ソ協会」を脱退するがソ連との関係を維持、60年から63年まで準国賓待遇でソ連訪問。
- 今回の「ウクライナ侵攻」に対しては、インテリ、リベラル層も概ね「プーチンの暴挙」として対応しているが、検証すべき事項もあるのではないか。

物語 ウクライナの歴史

元ウクライナ大使 黒川祐次

- ▶ 古代からウクライナ独立までの歴史や文化をこの新書のなかにふんだんに伝えてくれる。ただし、流れは理解できて情報が多すぎて凡人の私にとっては難解なものとなる。この間、モンゴルによる侵攻もあった。
- ▶ 究極はウクライナ人とは、ウクライナ国とはなんであるかとなる。肥沃な農地をかかえ東西の要衝であるがために国家を容易に持つことができず、近代でも母語を学び使うことができなかったこともあった。
- ▶ 中世以降だけでもロシア、ポーランド、リトアニア、スウェーデン、オーストリー、トルコ等との領土争奪戦、民族間の戦いは数知れない。
- ▶ ここに、ロシア革命や居住するユダヤ人が絡み、さらに宗教が加わる。国家を持たないウクライナの人々は心ならずも同一民族で銃を構えることもあった。

→ ローマ教会は「反共」だけでなく「ギリシャ正教」への違和感から反ファシズムとはならずユダヤ人虐殺、独ソ戦にも沈黙した。 ローマ教皇とナチス (文春新書) 新書 - 2004/2/22 大澤 武男 (著)

- 私たちにとってはウクライナは旧ソ連の一部であり、この地域のことは学ぶこともなく知ろうともしなかった。あの美しいウクライナのまちの多くもスターリンに徹底的に破壊されたという。歴史的な飢餓も旧ソ連の外貨獲得と無計画な農業の集団化の強要にあった。
- 民族自決が叫ばれたロシア革命時にも独立を試みたが、結局は旧ソ連だけでなく戦勝国にも無視され続け、苦肉の策なのか、一部がナチス側につきユダヤ人虐殺（バービ・ヤール事件等）に関わることもあった。これがまたウクライナの不幸を招いている。（戦後、米国はこの勢力を免責し、CIAがこの勢力を利用したとの説もあるし、アゾフ部隊が存在する。）
- 「ウクライナ国民共和国」が、旧ソ連、第1次世界大戦の戦勝国に無視されたのは、この「国」の性格が社会民主的であり、これが、戦勝国にも嫌われたというのが黒川氏の見解。
- プーチンはレーニンがウクライナの存在を認めたこと自体を誤りと主張している。

ウクライナ中世概略史

- キーウ・ルーシの成立
- 1240年 モンゴル軍キーウ攻略
- 1340年 ポーランドの東ハリチナ地方占領
- 1362年 リトアニアのキーウ占領
- 1648年 フメリニツキーの蜂起（ポーランドからの独立戦争）
- 1654年 ペレヤスラフ協定
- 1764年 ポルタヴァの戦い（ロシアからの独立戦争）
- 1853年 クリミア戦争
- 1914年 第一次世界大戦

ウクライナ現代史年表

(注) ウクライナ人民共和国＝ウクライナ国民共和国

- 1917年2月：2月革命によりロシア帝政が崩壊し、ロシア臨時政府が成立。
- 1917年3月：キエフでウクライナ中央ラーダ成立。ウクライナ人民共和国樹立宣言。
- 1917年10月：10月革命によりロシア臨時政府が崩壊し、ソビエト政権が成立。**ウクライナ・ソビエト戦争**勃発。
- 1918年1月9日：ウクライナ中央ラーダ、ウクライナ人民共和国独立宣言。首都はキエフ。
- 1918年2月8日：ソビエト軍、キエフを占領。
- 1918年2月9日：ブレスト＝リトフスクで、ウクライナ人民共和国とドイツ・オーストリアの間に条約完結。
- 1918年2月 - 3月：ドイツ軍、ウクライナの開放開始。赤軍の撤退によりウクライナ中央ラーダがキエフ帰還。
- 1918年4月29日：ウクライナ中央ラーダの無能のため、スコロパードシキー大将の政権が成立。国号は**ウクライナ国**となる。

- 1918年10月19日：オーストリア・ハンガリーの解体に伴い、ガリツィア・ブコビナ地方で西ウクライナ人民共和国独立宣言。
- 1918年11月1日：フランスの支援を受けてポーランド共和国が西ウクライナへ侵入し、ウクライナ・ポーランド戦争勃発。
- 1918年12月19日：蜂起によりスコロパードシキーの政権が倒され、執政内閣政権が成立。国号は再びウクライナ人民共和国。ウクライナ・ソビエト戦争再開。
- 1919年1月6日：ハルキウでソビエトの傀儡政権としてウクライナ社会主義ソビエト共和国樹立宣言。首都はハルキウ。
- 1919年1月22日：キエフでウクライナ人民共和国と西ウクライナ人民共和国との併合（統一の日）
- 1919年2月5日：ソビエト軍、キエフを占領
- 1919年7月18日：ポーランド軍、西ウクライナを占領。
- 1920年4月21日：ポーランド政府、ウクライナ人民共和国の亡命政府（ペトリューラ）と攻守同盟を完結。

- 1920年4月25日：ポーランド・ソビエト戦争開始。ウクライナは戦場となる。
- 1921年3月18日：リガ条約により、ポーランド・ソビエト戦争終結し、西ウクライナはポーランド領、その他はソビエト領となる。
- 1922年12月30日：ソ連邦結成。ウクライナ社会主義ソビエト共和国はその一員となる。
- 1923年4月4日：ウクライナ共産党第7回協議会でウクライナ化政策採択。
- 1929年9月4日：ウクライナ語の新正書法を制定。
- 1929年1月28日：ウィーンでウクライナ民族主義者組織（OUN）結成。
- 1929年12月：ソビエトのウクライナで農業集団化開始。
- 1930年1月：ソビエトのウクライナでウクライナ独立正教会解散。
- 1930年9月16日：ポーランド政府によるウクライナ人への弾圧強化。
- **1932年12月 - 1933年3月：ソビエトのウクライナ全域とウクライナ人在住地域で人工的な大飢饉（ホロドモール）。**
- 1934年6月24日：ソビエトのウクライナの首都はハルキウからキエフへ移る。

民族自決主義

- 民族は自己の運命をみずから決定する権利があると主張する原則
- この主張は特に第一次世界大戦を通して強められ、まず、ロシアの十一月革命によりソヴィエト政府によって宣言された。ウィルソンの十四か条の原則もこれを提示し、パリ講和会議で主要な課題となった。
- ソヴィエト政府のウクライナへの姿勢も民族自決を認めるものではなかったし、ウィルソンの原則も敵対勢力である「ドイツ、オーストリア・ハンガリー、オスマンの弱体化のために分割を図った」と考えるのが妥当

第2次世界大戦後

- 第2次世界大戦後の混乱は、ウクライナの民族運動（UPAのバルチザン活動）が継続。（西ウクライナ）
- フルシチョフ時代には、クリミアをウクライナに帰属させたが、住民多数派はロシア系であった。
- ブレジネフ時代はロシア語の使用が奨励、停滞の時代
- ゴルバチョフの主権国家連邦構想がとん挫、完全独立達成（旧ソ連崩壊時の棚ボタ？）
- もともと国境が不明確なユーラシア大陸内にあり、民族が入り乱れる国家であるが、ロシア系、ウクライナ系といって遺伝学的なものより「母語」で「民族」が分断されてきたことを前提にすれば、少数派のロシア系の住民にとって1991年の独立以降、住みにくい国家となったことは想像できる。

- 1941年9日：ナチスドイツによるユダヤ人虐殺（バーミヤール事件）
- 1954年2月19日：クリミア半島がロシアからウクライナへ移管される。
- **1986年4月26日：チェルノブイリ原発事故発生。**
- **1991年8月24日：ソ連より独立宣言。**
- 2004年11月-2005年1月：オレンジ革命。
- 2014年2月18日-23日：マイダン革命による親ロシア政権打倒。
- 2014年3月18日：ロシアのクリミア併合。
- 2014年5月12日：ドネツク人民共和国・ルガンスク人民共和国の独立宣言。（未承認「国家」）
- 2021年3月：ロシア・ウクライナ危機の発生。
- 2022年2月21日：上記の二カ国をロシアが承認。
- **2022年2月24日：ロシアによるウクライナ侵攻開始。**

オレンジ革命

ネオナチ、外国勢力の暗躍??

- 別名：ウクライナ民主化革命 英語：Orange Revolution
- 2004年のウクライナ第3代大統領選において、当初の開票結果に民衆が猛抗議を行い、再選挙を実施させ、ついに選挙結果を覆すに至ったという、一連の出来事。政変。
- 2004年のウクライナ大統領選は、当時ウクライナ第9代首相を務めていたヴィクトル・ヤヌコーヴィチと、第7代首相を務めた経緯があるヴィクトル・ユシチェンコが一騎打ちで争う形となった。開票結果はヤヌコーヴィチが勝利したが、ユシチェンコ支持勢はこれに不正が働いていたとして激しい抗議活動を行った。抗議は裁判に持ち込まれ、最高裁は決選投票をやり直すよう求める判決を下した。再選の結果、**ユシチェンコが逆転勝利**を収め、第3代大統領に就任することとなった。
- オレンジ革命という呼び名は、抗議運動を行った民衆の多くがシンボルカラーとして身につけていた服や旗などのオレンジ色に依拠するとされる。
- この政変で成立したユシチェンコ政権であるが、政権内部の抗争や「**経済の悪化**」により民衆も離反し、最終的に支持率が一桁に落ち込む。2010年のウクライナ大統領選挙では、一度は「革命」によって大統領になり損なったヤヌコーヴィチがウクライナ大統領に就任するという、皮肉な事態を招く。

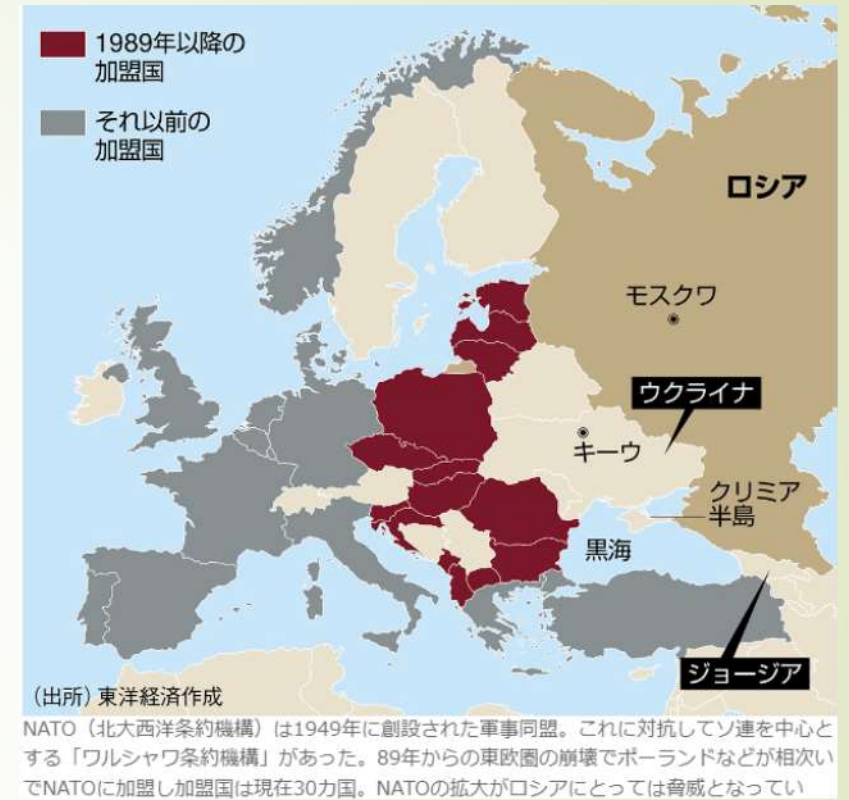
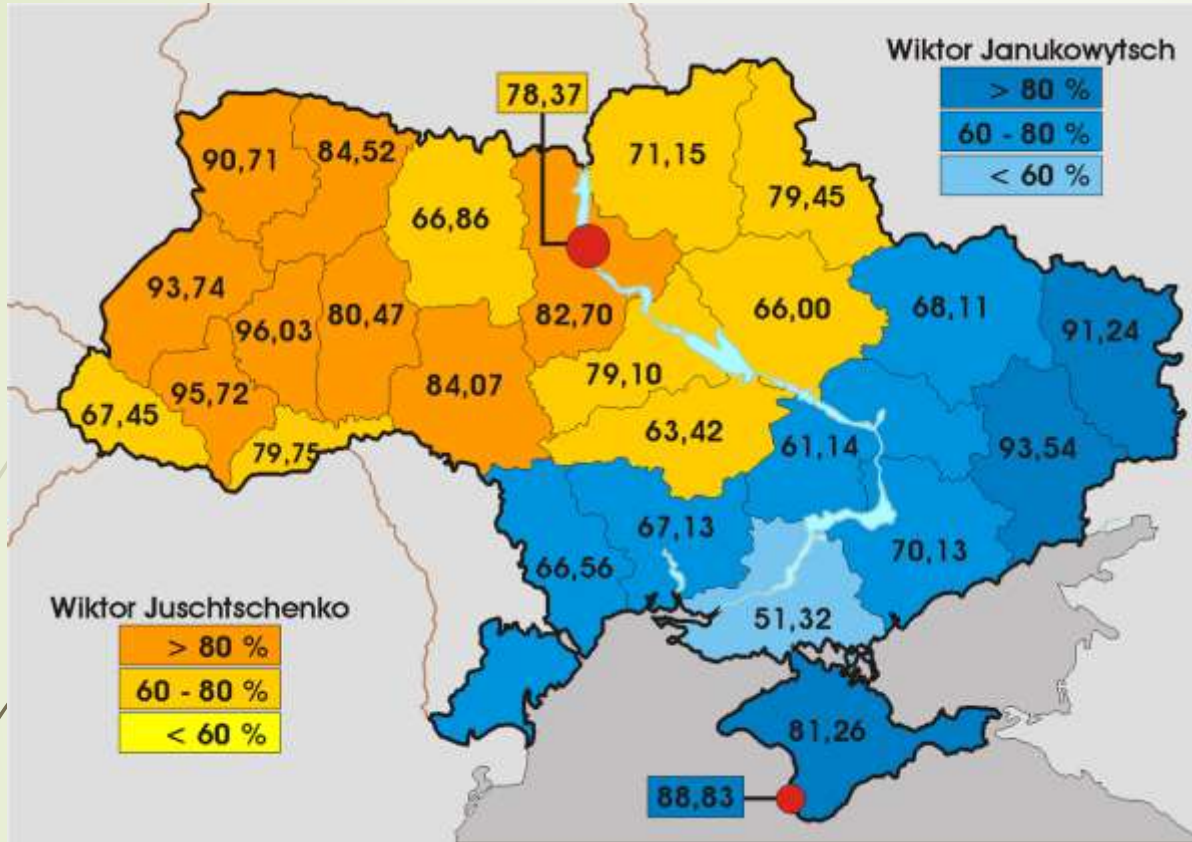
マイダン革命（尊厳の革命）

- ➡ 2014年のマイダン革命（尊厳の革命）は、復権した「親ロシア派」のヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領の追放をもたらした。ウクライナがロシアとヨーロッパ連合のどちらを選択するかが争われた2004年のオレンジ革命に続く革命。
- ➡ ウクライナ内閣は、待望のウクライナとEUの連合協定の草案を全会一致で承認。11月28日と29日にヴィリニウスで開催されるEUの「東方パートナーシップ・サミット」で正式に協定に署名する予定であった。
- ➡ しかし、ウクライナの最大の債権者であり、最大の貿易相手国であるロシアは、この条約は「混乱を引き起こし」、ウクライナとロシアの間の既存の条約の条件を破り、ウクライナ経済の崩壊につながると警告し、その後の経済的圧力からその方針を撤回したことから混乱が拡大していた。
- ➡ この革命の背後にLNG利権のバイデンが存在するとの情報もある。

バイデン大統領、ウクライナに積極姿勢のわけは 背景に深い関わり

- 現バイデン大統領は19年の民主党の大統領候補選出に向けた期間中、息子のハンター氏がウクライナのガス会社の役員を務めていたことが問題になった。
- バイデン氏は副大統領時代、腐敗対策でウクライナの検事総長の解任を求めたことがある。このガス会社が捜査対象だったため、トランプ前大統領は「息子を守るために解任させた」と主張した。
- バイデン氏は「息子と、海外の仕事について話したことはない」としていたが、ハンター氏はテレビのインタビューでガス会社の役員就任について「間違っていなかったが、判断は甘かった」と釈明した。

(朝日新聞有料サイトより引用)



2004年大統領選挙の選挙結果。オレンジがユシチェンコ支持、青がヤヌコーヴィチ支持。

プーチンから見たウクライナ

- プーチンは21年7月発表の論文で、ロシア人とウクライナ人は「一つの民族」だと主張した。これは、「**ロシア人**」は**大ロシア人（現在のロシア人）**、**小ロシア人（ウクライナ人）**、**白ロシア人（ベラルーシ人）**の3集団からなるという、**ロシア帝国時代の考え方に基づいている。**
- たしかに、ロシアとウクライナはともに、9世紀に現在のウクライナの首都キエフを中心にできた東スラブ民族による「キエフ・ルーシ」を一つの起源としてはいるが、それぞれの歴史の一段階にすぎず、ロシアとウクライナの歴史には共通性と差異の両面がある。(AERA 2022年3月14日号)
- 民族とは言語や文化、宗教を共有する人間の集団のことで、人々が帰属意識を持っていることも重要。「民族」の範囲は必ずしも固定的ではない。ウクライナ語とロシア語は似ていると思われがちだが、実はウクライナ語は、ロシア語と文法や語彙（ごい）がかなり違っていて、**語彙（ごい）の面ではポーランド語とのほうが共通**するものが多いと言っている。1991年にウクライナが独立して以降は、「ウクライナ語が国語である」と憲法に記載されるなど、「ウクライナ人」としての意識が強まっていた。(AERA 2022年7月24日号)

「ネオ・ユーラシア主義」とドゥーギン

- ▶ ユーラシア主義（Eurasianismus）とは、ロシア革命とそれにより成立したボリシェビキ政権（ソビエト連邦）に対する反応の一つとして、1920年代に白系ロシア人（非ソビエト系亡命ロシア人）の間に流行した民族主義的思想潮流。ヨーロッパロシアからシベリア、極東までユーラシア大陸北部に広大な国土を持つロシアは、アジアやヨーロッパのどちらか一方でなく、地政学的概念である「ユーラシア」に属することを主張する。
- ▶ 「非欧州」と「ロシア正教会」を主軸としたロシア文明の再構築を構想しつつ、ロシア革命とソ連の成立を、そこに至る必要な一過程として、肯定的に捉える。
- ▶ ソビエト連邦の崩壊後の、これを継承するネオ・ユーラシア主義が誕生し、ロシアは西欧よりもアジアに近いユーラシア国家だという主張を展開した。これに対しては、ロシアはテュルクやモンゴルよりもビザンチン帝国に近いという「ビザンチン主義」も主張している。（以上WIKI）

- 先日娘が殺害されたドゥーギン氏は1962年生まれ。2009～14年にモスクワ大学で国際関係の教授を務めるなど、ロシアで影響力のある思想家の一人。ロシアのウクライナ侵攻が進む中、同氏に注目が集まる理由は「ネオ・ユーラシア主義」と呼ばれる主張だ。
- 1997年に出版された本では、ロシアが他国との統合や同盟を通じて世界への影響力を強めるべきだと主張。「ウクライナという国には地政学的な意味や文化的な重要性、独自の民族性などはない」と主権国家としてのウクライナを否定した。それから25年後にウクライナ侵攻を始めたプーチン氏の主張と重なる。
- 14年にロシアが一方的にウクライナ南部クリミア半島を併合した際にも、「クリミアで満足すれば、（ウクライナ）南東部の兄弟を裏切り、クリミアだけでなくロシアも失うことになる」とさらなる侵攻を唱えていた。

『ウクライナ・オン・ファイヤー』

『ウクライナ・オン・ファイヤー』（オリバーストーン）は2014年の親米派によるクーデターや、それ以前から引き続くウクライナを巡る欧米・ロシアの矛盾に迫り、なぜプーチンが今回の軍事行動に及んだのか、その動機やもう一方の側の主張を知り、視野を広げるうえでも観るべきドキュメンタリーと伝えられる。

https://www.youtube.com/watch?v=4U_IzVh_KDs

しかし、あくまでも視野を広めるためのものであり、今回のプーチンの暴挙を免罪するものではないが、ロシア系住民の多い東部地域の問題を一考させる材料でもある。。（池田）

アゾフ部隊

反ロシアの民族主義集団かネオナチか

- アゾフ連隊の前身のアゾフ大隊はしばしば極右のナショナリストの民兵と説明されてきた。アゾフ大隊の創始者アンドリー・ビレツキーが極右政党の主催者であった事や初期の隊員らがウルトラスの中でも極右思想を持つ者が多かったことも強く影響している。
- 2015年『産経新聞』では、米通信社ブルームバーグやロシア国営メディアでニュース専門局（いずれも電子版）が『アゾフ連隊はナチス・ドイツの象徴であるハーケンクロイツの旗を掲げ、部隊章にはナチス親衛隊が用いた紋様「ヴォルフスアンゲル」を反転した紋様を用いている』と報じた。
- 独ソ戦では、長年のロシア帝国による支配、スターリンの圧政に反発する一部の勢力が、ドイツ軍を解放軍とみなした歴史的経緯もある。

- 公安調査庁ホームページ（2022年4月8日 更新）によると
- 近時、一部において、公安調査庁が「アゾフ連隊」をネオナチ組織と認めている旨の事実と異なる情報が拡散されている状況が見受けられますが、このような誤った情報が拡散されていることは誠に遺憾です。
- これは「国際テロリズム要覧2021」の「ネオナチ組織がアゾフ大隊を結成した」等の記載を根拠にするようですが、そもそも、「国際テロリズム要覧」は、内外の各種報道、研究機関等が公表する報告書等から収集した公開情報を取りまとめたものであって、公安調査庁の独自の評価を加えたものではなく、当該記載についても、公安調査庁が「アゾフ大隊」をネオナチ組織と認めたものではありません。
- ついては、上記のような事実と異なる情報が拡散されることを防ぐため、当庁HP上の「国際テロリズム要覧2021」から上記の記載を削除することとしたのでお知らせします。
- 公安調査庁のホームページが駐日ロシア大使館のSNSで流用され、アゾフ部隊が極右、ネオナチ組織だと紹介された経緯がある。

広瀬 佳一 防衛大学校教授 ウクライナ侵攻 はNATO拡大のせいではない。FBから

- ➡ 1. そもそもNATO拡大は、加盟希望国が申請することによってのみプロセスが開始されてきた。
- ➡ = アメリカが一方的に決めたり実行してきたりしたわけではない。
- ➡ 2. 冷戦後の拡大の前に、NATOとロシアは基本議定書（1997年）という取り決めで、新規の加盟国には部隊を常駐させない、核も配備しないという約束をしている。
- ➡ = だから拡大によりロシアの近くにNATO軍が来るとか、核が置かれるとかいうのは根拠のない被害妄想か、ロシアのプロパガンダ。
- ➡ 3. そもそも国家がどの国際機構や地域機構に加わるかは、国家主権の問題。

- 4.「ウクライナがNATOに入るだろう」という文言が入った2008年NATOブカレスト宣言がよく問題になるが、このときも独仏はロシアに配慮してウクライナが実際の加盟プロセスに移行することに反対したため加盟の展望は拓けないままだった。（独仏は欧州のパワーバランスが見えていた。池田所感）
- **プーチンがウクライナへのNATO拡大が脅威だと言うのは、独仏からすると「恩を仇で返された」感じ。**
- **2000年以降もNATOに入りたいという国が後をたたない理由の一つは、プーチンの威圧的な言動に脅威を感じるから**であって、その意味ではNATO拡大の原因を作っているのはプーチン。
- 非同盟のフィンランドやスウェーデンが急速にNATO加盟に傾いたのは好例。（極めて残念な事態、池田所感）
- NATOを拡大させたのが悪いという人は、小国の外交・安全保障は、大国に決める権利があるという大国主義的発想になっていることを自覚すべきでは？
- 『「世界」臨時増刊・ウクライナ侵略戦争』（岩波書店）「NATO変貌とエスカレーション・リスク」参照とのこと。

日経 8. 4 夕刊

国家の顔、個人の顔

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫



あすへの話題

2022・8・4

ロシア人は、一枚皮をむけばタタール人。ナポレオン時代のフランス外交官J・メーストルの言葉である。ここで言う「タタール人」とは、かつてユーラシア大陸を約250年にわたって支配したタタール・モンゴル人の総称。彼らの支配が過酷をきわめたことはつとに知られているが、司馬遼太郎はその史実を踏まえ、ロシアは国家としての歴史が若い分「ただけしい野性」をもつ、そしてこの「同情なき破壊者」の支配のもとで、外敵に怯える彼らの精神性が形成されたと述べている。

個人的な体験を言えば、これまでの数十回にわたるロシア滞在のなかで、ロシア人の「蛮性」を身近に感じた経験は一度もない。むしろ、友情に篤く、世界の平和を一人ですぐに夢見ている人たちという印象が強い。ただし、国家としての顔と個人の顔との間には深い断絶がある、との定説には、深く頷かされる瞬間が何度もあった。

思うに、メーストルは、ロシア人を、必ずしも「蛮性」に富んだ民族といった意味で捉えず、むしろ彼らの獷猛なともいえる「不屈の精神」に刮目したのではないか。独ソ戦における2700万人という戦死者の数は、そうした「精神」を念頭に置くことなしには理解しがたいものである。そしてプーチンが今、「まだ本気を出していない」と嘯くとき、彼の自信の底では、まさにこの「不屈の精神」が沸々とたぎっているのだと思う。歴代の為政者たちの人命軽視は、この「国家神話」が生き続けるかぎり止むことがないが、最新兵器ハイマースが、果たしてこの神話を打ち砕く決定的力となるのだろうか。

領事館前での抗議行動









最後に

- 客観的な情報を収集し真実を知る努力
- ベトナム戦争はフランス、米国の帝国主義戦争であったが、学生時代に神戸市内で保護されていたボートピープルの姿や1党独裁（開発独裁としても）を見逃すことはできない。
- 大国は人権や民族自決より自国の利益が優先、本来の大義名分（正義）では動かない。
 - ・ ウクライナ国民共和国
 - ・ ウクライナ大飢饉（ポロドモール）
 - ・ ロシア民族問題
 - ・ ウガンダ大虐殺（超大国の黙認）
 - ・ イラク戦争、シリア内戦、カンボジアでの大虐殺

釈迦に説法ですが



- ・ウクライナ侵攻開始後、スウェーデン、フィンランドが長年の中立政策を放棄しNATOに加盟し、ドイツも軍拡に着手しました。我が国も防衛予算を2023年度から5年間の総額を43兆円程度とすることを閣議決定しました。過去最大の増額で、現行5年間の計画から1.6倍に積み増すことになります。
- ・無防備、非武装が夢想であるとしても、文化交流の継続は必要です。軍拡競争の歯止めは温暖化と同様に人類の生存にかかわる問題です。
- ・本書もご参考まで。

- 本来地名はウクライナ言語に基づき表示すべきですが、旧方式で表示しておりますのでご容赦ください。